

一枚の絵の中に

私流・女らしさの知恵

早坂真紀



一枚の絵の中に

私流・女らしさの知恵

早坂真紀

一枚の絵の中に

平成12年 6 月10日 初版第1 刷発行

著 者 はや さか ま き
早 坂 真 紀

発 行 者 渡 辺 起 知 夫

発 行 所 しよう でん しゃ
祥 伝 社

東京都千代田区神田神保町 3-6-5

九段尚学ビル 〒101-8701

☎ 03 (3265) 2081 (販売)

☎ 03 (3265) 1084 (編集)

印 刷 堀 内 印 刷

製 本 ナショナル製本

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえます。

Printed in Japan. © 2000, Maki Hayasaka

ISBN4-396-61104-8 C0095

祥伝社のホームページ・<http://www.shodensha.co.jp>

一枚の絵の中に

目次

1章

「かっこいい女」になろうよ

7

渡せなかったラブレター 8

三十八歳の会 15

いい女は群れない 24

メイ・アイ・ヘルプ・ユー？ 34

お酒のルール 41

2章

「夢」をつかむために、しておくこと

51

コンプレックス 52

私のビタミン剤 61

明日美^{あすみ}さんの夢 72

もう一度やり直せたら 80

貴族願望 87

キャリーが教えてくれたこと 95

3章

「しあわせ」の見つけ方

103

母の火傷^{やけど} 104

私、東大を出ました 113

女性の敵 122

小さなしあわせ 131

「どうして？」 139

素人のひとり言^{ひとりごと} 146

4章

忘れてはいけない「大切なもの」

155

発展途上人 156

「カシオペア」の寝巻男 164

自分だけの物差し 173

女らしさって何？ 182

前略、マスコミの皆様 189

5章

年をかさねるのも、「素敵なこと」です

197

消えた保険金 198

犬よりも劣る奴ら 206

無神経な人たち 214

プライドの問題 221

こんなもの、いらない 229

~~~~~

あとがき

238

↓  
草

か  
こ  
い  
い  
女  
に  
た  
ろ  
う  
よ



## 渡せなかったラブレター

軽井沢の森の緑が眩<sup>まぶ</sup>しさを増してくるころ、一カ月ぶりに上京した。長野新幹線を利用したら、私の住む軽井沢から一時間ほどのところなのに、『あさま』からホームに出ると、そこはなんという不愉快極まる蒸<sup>む</sup>し暑さ。

都会は確かに文化的だし、便利などころには違いないのだけれど、こんなところは人間の住むところではないと心の中で悪態をつきながら、緑でむせかえっている軽井沢に、もう帰りたくなっていった。ゆうべだって、湯冷めしそうになって、慌<sup>あわ</sup>てて暖房を入れたくらいなんだから……。

夏に上京するのはもうやめようと思いながら山手線に乗り換えると、なんとまあ恥知らずな人たち……。人の迷惑も何のその、携帯電話でずつとしゃべりっぱなしの背広の

男性。若いカップルは人目もはばからず抱き合って、キスしたり目と目を見交<sup>か</sup>わしている。

行動に歯止めがきかないほど愛し合っているのだろうか。私のいつもの癖が出る。イメージの中で、自分はこうありたいという願望や、目の前の情景を、すぐ「一枚の絵」にしてしまうのだ。

そのときも若いカップルを『恋人たち』というタイトルで一枚の絵にして見ていた。しかしふたりのファッションや雰囲気では、どう巋<sup>ひいきめ</sup>眞<sup>ま</sup>目に見ても、その絵から美しさやほほえみは引き出せなかった。

それどころか、暑く苦しく不潔<sup>きせつ</sup>したらしきを感じる。別に電車の中で抱き合わなくても、傍<sup>そば</sup>にすることで切なさを感じたり、お互いの息遣<sup>づか</sup>いに愛を感じ合うことはできないものだろうか。電車の揺れでときおり触れ合う肌に、心がときめくなんてことはないのだろうか。そう思って目をそらせたら、座っているおばさんのお膝が開いていた。絶対、絶対見たくないものが丸見えだ。あゝあ、日本も変わったものだ。

何だか人が大勢いるところに来ると、私は気が立ってくるようだ。だって、今の日本人は全体にまわりを気遣<sup>きづ</sup>ったり、他人を思いやる心が少なくなったような気がする。自

己本位で、他人のファッションや流行りなどにはすぐ反応するくせに、『その場所に似合った自分』を気にすることはなくなつたようだ。むかしは私自身が若かつたから気がつかなかつたけれど、そのころの若者もそうだったのだろうか。

私だって人を愛したり、恋をしたことだって何度かあつた。しかし自制心はあつたつもりだ。いや、自制心があり過ぎたから、当時存在していた結婚年齢の適齢期を、通り過ぎかけたのかもしれない。

それでまア、胸の内を伝えないままに、結果的には振つたり振られたりしながら、二十代も残り少なくなつていた。もともと私は、一生結婚には縁がなかつたときのことを考へて、独り暮らしの老後のための生活設計を、しっかりとたてていた。それほど用心深かつたので、なおさら恋愛が私を避けていたのかもしれない。

しかし、仕事で知り合つた人に、気がついたら恋をしていた。仕事上の付き合いだったから、もちろん懲りもせず胸の内を伝えようとしないうで、さりげない付き合いのまゝ一年が過ぎてしまつた。ガッ！ どさくさまぎれだったかどうか、どういふ話の成り行きか忘れたけれど、ある日ドライブに誘われてしまつた。金曜日の夕方からいかがですか？ と言うのだ。えッ？ 金曜の夕方からってことは、一泊するってことでしょ？

お互いに若くはないんだし……と、結果を想像してしまう。

もしかしたら……、だけどいけないよなア。いくら若くないって言ったってまだ愛を告白しあったわけじゃないし、恋人宣言だってしたわけじゃないのに。

「ホテル、私が予約を入れてもいいでしょうか」  
また自制心が働く。

「あ、よろしくお願いします」

それで私は、列車時刻表の後ろにある広告ページでチェックしたホテルに電話を入れ、二部屋も予約してしまった。私、そのころとても貧乏で、爪に火を灯して<sup>とも</sup>老後のための準備はしていても、ホテルに泊まるなんて分を過ぎた余裕なんてなかったのになア。それでもやはり、彼との「ドライブ」の魅力には勝てなかったのだらう。

夜のホテルのラウンジで、街灯りや漁火<sup>あか いさりび</sup>を見ながらのおしゃべりは楽しかった。ノンアルコールの彼と、控えめだったとはいえアルコールの入った私は、会話の端々<sup>はしはし</sup>に互いの胸の中を見ようと、神経を張り詰めていたのかもしれない。少なくとも私は探りをいれていた。

ガラスには、街灯りと漁火があるとはいえ、ラウンジの様子も映っている。だから私

は、グラスの持ち方、煙草の吸い方、足の組み方にも細心の注意を払っていた。もしかしたら愛？……と、私にとってはこの上もなくロマンティックでしあわせなひとときだった。

「おやすみなさい」を言って、自分の部屋に引き揚げたあとも、ひとりでまたアルコールを飲みたい心境だ。グラスを持ったまま、ひとりで踊り明かしたい心境だ。しかし私には、ホテルに泊まることだって、分に過ぎたことなのだ。それで冷蔵庫の中にある冷えたビールに目をつぶっていた。

翌日は、海を見たり峠を越えたりと、楽しいドライブだった。しかしあの時、私たちはどんなおしゃべりをしていたのだろう。車の中という密室にふたりで居る。私は会話の途絶えるのが怖かった。だから私は、グリーン・ゲイブルスに向かうアン・シャーリーのように、次から次におしゃべりをしまくっていたと思う。

やがてたそがれて、私の住む北青山の、單身者用公団アパートの前に車は止まった。私は用意してあった白い角封筒を彼に差し出した。

「今日はありがとうございました。これ、ラブレターです。あとで読んでください」

一瞬、受け取ろうとした彼は、封筒を私に押し返した。

「あ、今日はぼく、ラヴレターを読む気分ではありませんから」

封筒のの中身……。金曜日のお昼休みに、銀行で下ろしてきた一人分のホテル代と、一応の目安のガソリン代を入れてあった。それは私の半月分の生活費だ。

たぶん、瞬間に封筒の中身を察した彼。手のひとつを握られたわけでもないのに、私の胸はときめいていた。青山通りを赤いカラローラが他の車の渦に溶け込んでいくのを、しあわせの余韻に漂いながらしばらく見送っていた。

日曜の朝、私はいつもの休日通りに限りなく寝坊をしていた。コトッと、ドアの郵便受けに手紙が落ちる音で目が覚めた。当時は、一階に集合郵便受けがあるのではなく、各戸のドアに郵便受けがあったのだ。彼からの速達だった。

昨日の夜の日付だ。帰ってすぐ書いて投函したのだろう。ふるえるような手つきで封を切ってとり出した便箋。手紙を読むなんてものじゃなく、目は文字の上を滑りながら、じんわりと涙が湧いてきた。中身？……言わない！ そんな大切なこと。

そのころはCMを作っていたけど、やっぱり彼は将来作家として成功するだけの素質があったのだなァ、としか言いようがない。

このエピソード、たとえば私たちのものじゃなくても、なんて爽やかなだろう。思い



出して我ながら照れて笑ってしまふ。いまどき、こんなカップルいるのかな。」「いい歳して、バックじゃないの?」と笑われるだけかもしれない。

しかし、電車の中や街中で抱き合っているカップルを見て、ほほえましいと感じている人は少ないと思う。「バックじゃないの?」カップルの妻は、たぶん夫の定年を待ちかねて、退職金をもらって家を出ていくようなこともしないと思う。

あれから三十三年。少なくとも私の彼への感情は変わった。恋愛から敬愛へと……。

蒸し暑い夏だからこそ爽やかな情景が欲しい。どんなに暑くても、せめて私だけは心頭滅却して涼しげな顔をしていたい。間違っても「アジイ、アジイ」と、ブラウスの胸元やスカートの裾をハタハタさせて風を送り込んだり、ヨレヨレのハンカチで首のまわりを拭くようなことだけはしたくないし、見たくもない。

ね、せめて自分だけは意地でも暑くないような顔をしない? いかにも暑そうな都会の街角で、爽やかな様子で胸を張って歩いている自分を、一枚の絵として想像してみない?